

一九三〇年 佐藤春夫・千代・豊太郎往復書簡紹介

―「没後六〇年 佐藤春夫展―智恵と友情と恋と!」開催記録を兼ねて―

河野 龍也 編

要旨

二〇二四年五月二三日から六月二一日にかけて、実践女子大学で「没後六〇年 佐藤春夫展―智恵と友情と恋と!」展が開催された。展示品の主眼は、佐藤春夫が父の豊太郎と交わした一九三〇年の往復書簡である。この年、春夫は友人の谷崎潤一郎の前夫人であった千代と結婚した。書簡は、非寛容な報道と脳溢血の発症により、作家生活最大の危機に立たされた春夫の状況を伝えている。この結婚において、春夫の父が大きな役割を果たしていたことが分かった。彼は千代の複雑な立場を理解して、家族のなかに積極的に居場所を作ろうと配慮していた。千代は春夫の両親に感謝の言葉を述べ、夫の介護にも極めて献身的に尽くした。そのことが春夫両親の信頼につながった経緯も確認できる。結婚当時の千代の感想が残されていたことは、友人間における妻の「譲渡」のみに注目してきた従来の理解に再考を迫ることになるだろう。

Introduction to the 1930 Correspondence Between Haruo Sato, Chiyo, and Toyotaro: A Record of “The Exhibition Commemorating 60 Years Since Haruo Sato’s Death : Wisdom, Friendship, and Love !”

Tatsuya Kono

From May 23 to June 21, 2024, Jissen Women's University hosted “The Exhibition Commemorating 60 Years Since Haruo Sato’s Death : Wisdom, Friendship, and Love !” The exhibition highlighted the 1930 correspondence between Haruo Sato and his father, Toyotaro. That year marked a turning point in Haruo’s life, as he married Chiyo, the former wife of his friend Junichiro Tanizaki. The letters reveal the profound challenges Haruo faced during this period, encompassing a career crisis exacerbated by relentless press scrutiny and the onset of a cerebral hemorrhage. Toyotaro played a pivotal role in supporting Haruo through these difficulties and in facilitating the marriage. He recognized the complex position of Chiyo and made significant efforts to welcome her into the family. Chiyo, in turn, expressed heartfelt gratitude to the parents of Haruo and demonstrated unwavering devotion to her husband’s care, earning the trust of Haruo’s family. The reflections of Chiyo from the time of her marriage, which have been preserved, challenge the traditional narrative that has primarily prioritized the “transfer” of a wife among friends.

一 はじめに

一九六四(昭和三九)年五月六日、ラジオ放送の番組収録中に「私は幸いにして…」との言葉を最期に佐藤春夫が急逝してから、二〇二四年で六〇年を迎えた。

二〇一〇年に春夫ご長男の佐藤方哉氏が逝去されてから、佐藤邸に残されていた春夫旧蔵資料は、継承者の高橋百百子氏のもとで保全が図られ、牛山百合子氏を中心に整理が進められてきた。編者は牛山氏の補助として実務を担うにあたり、実践女子大学文芸資料研究所の強力なバックアップを得るによって、この作業を進めてくる事が

できた。

この縁により、文芸資料研究所と新宮市立佐藤春夫記念館との間で研究協力関係が構築できたのは、春夫研究の進展にとって極めて大きな意義があったと思う。具体的には、二〇一四年に佐藤春夫記念館が開催した佐藤春夫歿後五〇周年記念展示「佐藤春夫と〈憧憬の地〉中国・台湾」展への協力、二〇一九年に同館が開催した「佐藤春夫と谷崎潤一郎―「離れえぬ縁」」企画展への協力のほか、二〇二〇年には国立台湾文学館が台南で開催した「百年の旅人―佐藤春夫

60 没後
佐藤春夫展
Haruo SATO
智恵と友情と恋と！

智恵と友情と恋と
この三つのものを
世間ぢや宝だと言ひふらす
僕もせいでい捜して見たさ
たうどうお目にはかからない

展覧会
2024年
5/23(木)～6/21(金)
10:30～17:00 土曜閉館 (4/6日 12:00 17:00, 6/18日は閉館)
会場 実践女子大学豊田記念資料館(実践女子大学豊田キャンパス内)
※ 入館料 無料 事前申込不要

講演会「春夫文学の新たな沃野」
2024年
6/8(土) 14:00～15:45 (13:30開場)
会場 実践女子大学豊田キャンパス 403教室

春夫と千代 事件と事実の間―河野 龍也
(国立台湾大学東亞言語文化研究所 所長 兼任)
春夫作品のなかの家族像―大原 祐治
(大原 祐治 氏)
近代翻訳文化と佐藤春夫―フルナルカ―シュ
(フルナルカ―シュ 氏)

司会 高瀬 真理子
(実践女子大学豊田キャンパス 学芸部 部長 兼任)

実践女子大学
PRACTICE WOMEN'S UNIVERSITY
主催：実践女子大学文芸資料研究所
共催：公益財団法人佐藤春夫記念会
協賛：東京府の施設関係機関と協力：実践女子大学

展覧会資料は文芸資料研究所内に貸し出し
品切れ時は、03-6455-6000
お問い合わせください。 実践女子大学文芸資料研究所

会場への地図

講演会場で書籍等を販売した。
「たれぞなる春夫の遺稿」(2022年 読者書局刊)を
販売します。税込定価：1980円

図1 ポスター

一九二〇台湾旅行文学展」に、記念館の運営母体である公益財団法人佐藤春夫記念会と文芸資料研究所とが共催団体として出品協力した実績がある。二〇二二年に、実践女子大学と新宮市立佐藤春夫記念館との間で包括連携協定が締結されたのも、これらの経緯を踏まえてのものであった。

実践女子大学では、連携協定締結に際して、「生誕一三〇年記念 知られざる佐藤春夫の軌跡―不滅の光芒―」展を開催した。今回の「没後六〇年 佐藤春夫展―智恵と友情と恋と!」展は、協定締結後二回目の共催展であった。展示品の主眼は、一九三〇(昭和五)年、谷崎潤一郎元夫人の千代と春夫の結婚が「細君譲渡事件」として物議を醸した時期に、家族内でやり取りされた書簡の数々である。これらは二〇二三年に高橋百百子氏より新宮市立佐藤春夫記念館に寄贈され、新出資料として注目された。

本稿は、展覧会の展示内容を記録として残す意味を兼ねて、展示品のうち家族書簡の翻刻を掲げるものである。

翻刻は、佐藤春夫・千代が執筆した書簡に関しては、新宮市立佐藤春夫記念館の辻本雄一館長、公益財団法人佐藤春夫記念会理事の森奈良好氏にかかるものであり、春夫の父・佐藤豊太郎書簡(実践女子大学保管)に関しては、河野龍也が担当した。

資料の保全に意を尽されてきた高橋百百子氏、および二〇二〇年に逝去された故牛山百合子氏に深甚なる感謝を捧げたい。

二 展示品解説パネル

0章 ごあいさつ

智恵と友情と恋とこの三つのものを世間ぢや宝だと言ひふらす

僕もせいぜい搜して見たさたうとうお目にはかからない

〔恋愛至上かも知れない〕『女性改造』一九三三年四月

これは佐藤春夫の文章に引用されたハイネの訳詩の一節です。友人と恋人を同時に失い、失意の底で自らの思いを託した言葉ですが、春夫の人生には続いて大きな展開がありました。

大正期浪漫派の俊才として谷崎潤一郎に認められ、一九一八年に『田園の憂鬱』で華々しいデビューを飾った春夫は、当時の妻との関係に悩む一方、夫から冷遇される潤一郎の妻の千代に自己の境遇を重ねて思いを寄せます。一九二〇年末、潤一郎は台湾旅行から帰った春夫に千代との再婚を勧めますが、突然撤回し両者絶交に至ります。春夫は孤独の中から詩を生み出しました。

一九三〇年、春夫は合議の上、十年越しの恋を実らせて千代を妻に迎えました。無理解な世間からは『細君譲渡事件』と騒がれるなか、春夫は脳溢血に襲われます。二〇二三年、春夫ご遺族から新宮市立佐藤春夫記念館に寄贈された多数の書簡のなかには、この危機と懸命に向き合う春夫と千代の心境が記されていました。その言葉は、智恵を出し合って孤立と不安を乗り越えた家族の勇気と、信頼の尊さを現代の我々にも伝えてくれます。

春夫没後六〇年の今年、新宮市立佐藤春夫記念館との連携協定の一環として企画されたのが本記念展です。実践女子大学所蔵の資料や寄託資料も含めて、書簡を中心に多彩な春夫の世界をお楽しみいただければ幸いです。

高橋百百子様をはじめ、本展示に深いご理解をたまわり、貴重な資料をご提供くださいました関係者の皆様にあつく御礼申し上げます。

二〇二四年五月二三日 実践女子大学文芸資料研究所

没後60年 佐藤春夫展 智恵と友情と恋と！

会期：二〇二四年五月二三日（木）～六月二二日（金）

会場：実践女子大学香雪記念資料館 企画展示室1・2

主催：実践女子大学文芸資料研究所

共催：公益財団法人佐藤春夫記念会

協力：実践女子大学香雪記念資料館

編集：河野 龍也（東京大学准教授／実践女子大学文芸資料研究所客員研究員）

資料提供：協力者御芳名（敬称略）

高橋百百子／竹田長男／竹田有多子／有賀由美子／太田比奈子／小林榮助／佐野安美／津島淳／東哲二郎／

室生洲々子／森奈良好／森雅文／新宮市立佐藤春夫記念館

*

講演会 春夫文学の新たな沃野

日時：二〇二四年六月八日（土）一四時～一五時四五分（一三時三〇分開場）

会場：実践女子大学渋谷キャンパス 四〇三教室

主催…実践女子大学・実践女子大学短期大学部公開講座／文芸資料研究所

共催…公益財団法人佐藤春夫記念会

内容…春夫と千代 事件と事実の間

河野龍也（東京大学准教授）

春夫作品のなかの家族像

大原祐治（実践女子大学教授）

近代翻訳文化と佐藤春夫

ブルナ・ルカーシユ（実践女子大学教授）

司会

高瀬真理子（実践女子大学教授）

Ⅰ章 覇氣あり！ 反骨少年

一八九二（明治二五）年四月九日、佐藤春夫は和歌山県東牟婁郡新宮町（現新宮市）に医師・佐藤豊太郎の長男として生まれました。明星派短歌を詠む先輩に影響され、新宮中学時代に才能が開花。三年で留年すると文学熱はさらにエスカレートします。父は将来病院の後継者にと望んでいましたが、俳諧を好み文人趣味を持つ父は子の文学的才能に期待するところもあって、悲喜こもごもの複雑な心境だったようです。

中学五年生の一九〇九（明治四二）年夏、生田長江・与謝野寛（鉄幹）・石井柏亭を招いて開催された文学講演会で前座登壇した春夫は、その反権威的な内容を咎められ、停学処分を受けます。一九一〇（明治四三）年三月に卒業。エリートコースの第一高等学校を受験する名目で上京しましたが途中棄権し、慶應義塾予科に入学して文学修行に励みます。一高再受験を求める父には、「今日の学校制度なるものが真の学芸を究むる上に於て果して何の意義ありや」と反抗しています【Ⅰ・Ⅰ】。

修業時代の春夫は、天皇暗殺計画の嫌疑（冤罪）で処刑された新宮の医師・大石誠之助を悼む「愚者の死」（『ス

バル』一九一・三)や、乃木希典の天皇への殉死に忠義よりも信念の美を見た「同時代私議」【I・2】(『スバル』一九一・二)など、舌鋒鋭い詩と評論で話題を呼びました。強権に対する怒りや、捨て身の理想家に対する共感、西洋文学への強い憧れ【I・3】など、春夫文学の根幹はこの時期に形成されました。

一九一四(大正三)年頃、春夫は石井柏亭(洋画家)の勧めで油絵を始め、画家への転向を摸索します。既存の権威を認めない春夫の奔放な発言が文壇の一部で敬遠され、作品発表の場が狭まってしまったからでした。しかし、春夫は絵画にも卓越した才能を持ち、第二回から第四回までの二科展(一九一五―一七)に毎年作品を入選させる腕前を見せます。

一九一六(大正五)年、神奈川県都筑郡中里村(現横浜市青葉区市ヶ尾附近)に転居し、農耕で生計を立てる計画でしたが、芸術家志望の青年が田舎の廃園で瀕死の薔薇を見つけ、その花に復活の夢を託すという小説の構想を得て帰京します。

こうして書かれた「病める薔薇」(『黒潮』一九一七・六)は、連載後半の掲載を妨害されるといふ信じがたい不幸に見舞われますが、同じ年(一九一七年)には新人として売り出し中の芥川龍之介や、悪魔主義を標榜して明治末から強烈な個性と存在感を保っていた谷崎潤一郎に才能を認められ交流が始まります。

一九一八(大正七)年、春夫は「病める薔薇」を書き直した小説「田園の憂鬱」(『中外』一九一八・九)で一躍文壇進出を果たしました。潤一郎は第一短篇集「病める薔薇」【I・4】(一九一八・一一、天佑社)に序文を寄せ、春夫の華々しいデビューを祝福しました。退屈な日常を超越する濃密な夢の世界を芸術に期待した二人は、大正文壇にロマン主義の花を咲かせる盟友として認め合い、日々熱い芸術談義を交わしました。

II 章 傷心を抱いて南国へ

デビュー当時、春夫は舞台女優と同棲していましたが、彼女がひそかに春夫の弟と親密になっていたことを知ってショックを受けます。一方、潤一郎が映画女優であった妻の妹を愛し、妻子を顧みなくなっていたことにも心を痛めます。自分と同じ境遇にありながら、何も知らずにいる潤一郎夫人の千代に、春夫は深い憐れみを寄せたのです。それはいつしか慕情と見分けがたいものになっていきました。

一九二〇(大正九)年、人間関係の煩わしさからスランプに陥った春夫は、文壇の第一線から退いて新宮で療養生活を始めます。このとき、中学時代の親友で台湾(当時は日本の植民地)に齒科医院を開業していた東熙市(ひがしきいち)と偶然町で再会し、誘われて打狗(タカオ)(高雄)の新居を訪ねます。

春夫の台湾滞在は、七月六日から一〇月一五日までの一〇二日間に及びました。その間、春夫は台南や鳳山など台湾南部の街を歩いたり、対岸の福建省廈門(アモイ)に渡ったり、台湾原住民研究者の森丑之助に勧められて山地経由で台湾を縦断したりしながら、植民地や租界の実情を目のあたりにしました。

この旅からは多数の名作が生まれました。主要作品は紀行文集『南方紀行』【Ⅱ・3】(一九二二、新潮社)と作品集『霧社』【Ⅱ・11】(一九三六、昭森社)の二冊の書物にまとめられました。熙市の親切な友情は、作家生命の危機に立った春夫をみごとに救ったのです。

日清戦争後に日本の領有が決まってから二五年が経った一九二〇年の台湾は、総督府の方針も武断統治から文化的施政への転換期に差しかけていました。当時、「内地人(日本移民)」「本島人(漢族系住民)」「蕃人(原住民)」の三種に大別されていた台湾住民の同化政策が進行中で、伝統的地名を日本風に改称するなどの強硬策が新たな反発を招いていました。そのさなかを旅した春夫は、統治の暴力性に敏感に反応する作品を書いています(『植民地の旅』『中央

公論』一九三二・九、一〇など）。

「台湾もの」の代表作で、怪談・推理小説・社会批評の三つの顔を持つ名作「女誠扇綺譚」【Ⅱ・10】（『女性』一九二五・五）も、台湾史の深い理解に裏付けられた作品です。結末の哀れな少女の死には、植民地社会の悲劇が凝縮されています。

春夫が政治的に優位な「内地人」の立場に囚われず、柔軟な姿勢で「支配される側」の感情を捉えることができたのは、「本島人」の間に豊富な人脈を持っていた東照市や、山地に住む台湾原住民への武力攻撃に抗議した森丑之助など、すぐれたアドバイザーの手引きがあったからです。春夫の作品は、二一世紀の台湾でも高い評価を得ています。

なお、台湾旅行の日程は、春夫の記述から従来もおおよその推測は可能でしたが、最近佐藤春夫記念館に寄贈された父宛の手紙から、新宮出発日（六月二六日）と神戸帰還日（一〇月一九日）がほぼ確定されるに至りました【Ⅱ・1】
【Ⅱ・2】。

Ⅲ章 かなくく白くうつくしく

台湾旅行中に妻との離縁を決意した春夫は、内地に帰るとそのまま谷崎潤一郎が住む小田原に身を寄せます。潤一郎は春夫に千代夫人との再婚を勧めますが、千代の妹との交際が破綻すると、潤一郎は翻意します。春夫と心を通わせ始めていた千代も、娘鮎子のために潤一郎に従うほかありませんでした。

一人放り出された春夫は、小田原の家に近い海辺の宿（養生館）に滞在して千代の訪問を待ち、潤一郎に対抗しましたが、激しい手紙のやりとりの末【Ⅲ・1】、夫妻と絶交します。

春夫にとっては、恋人と友人の両方を失う最悪の事態でしたが、会えない千代に寄せる思いが詩になり、大正期抒

情詩集の名篇とうたわれる『殉情詩集』【Ⅲ・2】（一九二一・七、新潮社）や『秋刀魚の歌』（『我が一九二二年』【Ⅲ・3】一九二三・二、新潮社所収）などの名作が生まれました。

自身の恋心を純真な初恋に喩えた『水辺月夜の歌』から、大人になった今はそれが叶わぬことを嘆く『海辺の恋』に至り、さらに一人芝居の滑稽さに苦しむ『メフィストフェレス登場』まで、『殉情詩集』は失恋後の心境の変化を追った連作形式の歌物語とも言える編集になっています。

「あはれ」の吐息が始まり、「をかし」の自嘲で終わる『秋刀魚の歌』も、今は切ない胸の内を秋風に託すしかない別離の悲しみを詠いあげています。春夫詩の哀切な調べは、いつの時代も失った恋の幻影に苦しむ孤独な人の心をとらえて離しません。

谷崎夫妻との絶交——いわゆる「小田原事件」は、詩歌を卒業して小説に転じた春夫が、再び詩を書くきっかけになりました。しかし、恋人との別離が長引くにつれ、詩に託した思いを聞き届けてくれる相手の姿も見えなくなってきました。やがて春夫は、無理解な観客の笑いにされる自分を自嘲する形でしか、恋心の持続を確かめられない苦境に陥っていききました。「あの女に聞かれない歌が何にならう！」（『酔っぱらひ歌』【Ⅲ・8】『新家庭』一九二二・六）という叫びは、孤独の苦しみの表現であり、詩の無力さを嘆く声でもあります。

この時期の春夫の小説は、初期の耽美主義やロマン主義の作風から一変し、夢破れた男の落魄の姿を描く『私小説』へと転換していききました。『剪られた花』【Ⅲ・6】（一九二二・八、新潮社、原題『その日暮しをする人』）や『佗しすぎる』（『中央公論』一九二三・四）など、春夫の私小説が「書けない詩人」を主人公として登場させていることは重要です。詩で夢が追い切れなくなった芸術家の姿を小説に描く——という形で、以後の春夫のなかでは二つの表現ジャンルが意識的に使い分けられるようになっていったのです。また、失恋詩人の純情を「作者」が冷やかす『薔薇と真珠』【Ⅲ・

10】『現代』一九二二・一一)のような戯曲ジャンルへの挑戦が始まるのもこの時期の特徴です。

潤一郎との私生活上の決別は文学上の決別も意味していました。「小田原事件」は春夫文学の大きな転機になったのでした。

IV章 恋の試練を乗り越えて

関東大震災を機に潤一郎一家は関西に移住します。春夫も一九二四(大正一三)年、赤坂の芸妓で、改造社の山本実彦の紹介で知り合った小田中タミと結婚し、娘のみよ子も引き取ります。

「小田原事件」以来書き続けてきた失恋小説に区切りをつける時が来ていました。ハイネの詩をふまえて名付けられた小説「この三つのもの」(『改造』一九二五・六・翌二〇)は、「事件」を題材にしつつも、登場人物それぞれの「智慧」「友情」「恋」の真価が問われる重厚な長篇小説になるはずでした。

しかし、この小説は連載なかばで中断されています。春夫の女性関係に悩んだタミが、潤一郎夫妻を東京に呼び寄せて相談したことにより、長きにわたる絶交状態が解消されたのです。距離をとって「事件」を眺めることが困難になったのでした。

一九二七(昭和二年)、小石川関口町に家を新築し、上海にも旅行した春夫一家は、順風満帆で外見上は幸福そうに見えたが、夫妻の関係にはすでに修復したい亀裂が生じていました。一方で潤一郎も、千代夫人との性格上の齟齬に手詰まりを感じ、互いの幸福のために別れる選択を考え始めていました。

一九三〇(昭和五)年七月二四日、タミと別れた春夫と、潤一郎夫妻・鮎子・千代の兄小林倉三郎の間で話し合いが持たれ、千代は潤一郎と離婚、春夫と再婚することに同意しました。この決定は八月一八日付で関係者に通知され【IV

・2)、「細君譲渡事件」として一大センセーションを巻き起こします。

千代の再婚に関する従来の理解では、潤一郎・春夫間の「譲渡」という見方がなされ、好奇心の対象にされがちでした。千代を迎える春夫両親の動向や、一方的に「譲渡」されたかに見える千代の真情が、十分に見えてこない問題があったのです。

ところが二〇二三年になって、春夫ご遺族から佐藤春夫記念館に一〇〇通以上の家族宛て書簡が寄贈されました。記念館と協定関係にある実践女子大学では、豊太郎書簡の解説と併せて共同研究を行った結果、家族が信頼を寄せあいながらスキャンダルに耐え、逆境を乗り切ろうとしていた様子が見えてきました。

春夫と千代の新婚生活は、阪急岡本の潤一郎宅で始まりました。しかし、悪意ある報道や鮎子の退学などで春夫の心労は絶えず、九月二〇日頃脳溢血で倒れます。紀州下里(新宮南方)の実家から父母が駆け付け、千代が懸命に介護に励みました。

春夫は不自由な手で、文字のかわりに絵を使って父に病状を伝えました。また、春夫父の指示でリハビリを助けた千代は、報告に添えた手紙のなかに、「私はほんたうにしあはせに存じます」という言葉を記しています【Ⅳ・10】。春夫の症状は献身的な千代の介護の甲斐あって、徐々に和らいでいきます。

千代の人柄は佐藤家の人々に深い感銘を与えました。そのこまやかな気づかいは、やがて文壇の名物として知られるようになり、関口町の春夫邸の応接間は、戦前・戦後を通じて芸術家志望の青年で大いに賑わいを見せました。

三 一九三〇（昭和五）年家族書簡―展示品より―

翻刻 辻本雄一

森奈良好

河野龍也

1. 昭和五年八月一〇日 春夫から豊太郎宛（Ⅳ・5）

（表）和歌山県東牟婁郡下里町高芝

佐藤豊太郎様

（裏）

神戸市外阪急岡本

谷崎氏方 佐藤春夫

八月十日

（消印）大阪中央 5・8・11 后5―6

八時二十分大坂へ入港 海上は頗る平和でした 千代子も喜び早速御礼状を差上げる可き乃とて不慣れ乃船旅で疲れ病人のやうになつて居り外ので恢復次第御挨拶申上げます由延引を予めお詫申上げくれよとの事に御座います 今度の儀は申すまでもなく深き決心を以ての上の事です 今までの如き御心配を重ねて御掛け申すがごとく事必ず必ず無之これは何卒御安心下さいませ。千代病氣の爲め上京も両三日延びましたが一両日中には東上する筈です 右用

（封書 卷紙 墨書）

事のみ

八月十日夜

尊大人様

尊北室様

膝下

春夫 拝

【解説】八月四日、潤一郎、春夫、千代は、春夫の両親に結婚挨拶のため、三人で下里に赴いた。潤一郎は先に帰り、春夫と千代は八月一〇日岡本の谷崎邸に帰着。千代が疲れて体調不良のため、暫く谷崎邸に滞在し、東京に戻る予定であった。「今度の儀は申すまでもなく深き決心を以ての上の事ですから今までの如き御心配を重ねて御掛け申すがごとき事必ず必ず無之（これなく）これは何卒御安心下さいませ」と固い決意を述べている。

2. 昭和五年八月二一日 春夫から豊太郎宛(Ⅳ-6)

(封書 原稿用紙一枚 ペン書)

(表) 和歌山県新宮町

内海医院方

佐藤豊太郎様

直披

(裏) ✂

東京市小石川区関口町二〇七

佐藤春夫

八月二十一日

(消印) 小石川 5・8・21 后4―5

御手術うまく出来ましたよし、結構に存じます。一週間ぐらゐのうちに御帰宅の御予定の旨拝承安心いたしました。当地は久しぶりに帰着の事とて用事の人無用事の人刻々殺到、世評もやかましく少々閉口して居りますが、何とぞ仕方がないと御あきらめを願上ます。米子よりも御便り御見舞を差上げます筈ですがよろしくと申上げて居ります。万端、も少し落つき次第申上げます。右ちよつと遅れながら無事着の趣と御見舞まで。兩人宛の御訓言の御手紙は正に感銘深く拝誦。いづれ後便にて万縷。不備

八月二十一日

春夫

尊大人様

【解説】八月一七日、潤一郎、春夫、千代の三人連名の結婚挨拶状が作成され、一八日に送付された。一九日、各紙が社会面トップで書き立て、「細君讓渡事件」としてセンセーションを巻き起こした。その直後に書かれたこの手紙には、「用事の人無用事の人刻々殺到、世評もやかましく少々閉口して居りますが、何とぞ仕方がないと御あきらめを願います」と、じつと騒ぎに耐える様子が窺える。この時、豊太郎は手術のため新宮の内海医院（丹鶴病院）に入院中だった。

3. 昭和五年九月四日 春夫から豊太郎宛(Ⅳ・7)

(表) 和歌山県東牟婁郡下里町

佐藤豊太郎様

平安

(裏) 封

神戸市外阪急

岡本 谷崎氏方

佐藤春夫

九月四日

(消印) 御影 5・9・6 □□—□

御手紙拝見致しました。龍児も昨晚こちらへ参りそちらの御様子も伺ひました。母上御病気の由御案じ申します。

紛々たる世評はまことに困つたものですが、今更致し方ありません。そのうちには自然と本当の事がわかるものと信じてゐます。仕事を頼んでくれる方面はそれぞれ永年の交際ですから自然何もかも知つてゐてくれますし、読者にしましてもさう程度の低い人ばかりでもありませんから、世評のために作品を顧みてくれないなどの事は一切御懸念御無用かと存じます。只今でもとても間に合はないほど引受けて居りますから、何とぞ御安心下さい。ただ雑事のためにしばらく筆硯に遠ざかつて居りましたので、筆をとり出すのがむづかしくなり、しかしこれはいつもの習慣ですから書き出せば楽々と出来るものとわかつて居ります。先日の御言葉のごとく一生一作と申すべきものにも取かか

(封書 原稿用紙三枚 ペン書 封筒墨書)

りたいと決心を致してゐます。

鮎子の学校がまだこちらにするか東京になるか決定しないので居住もきまらずこれが只今のところ一番気の落ちつかぬ原因です。

少々困窮しても居りますが、これも一度新聞小説でも書けばすぐ楽になりますから、大して苦にもして居りません。いよいよとなればいくらでも策はあります。

母上からの御電報で電話をやるなどの仰せでしたが、面倒くさくもあり、米子も自分か来てから強硬に出るのも自分が意地悪をいふやうで困るなど申しますから、くれてやることにしました。

一日も早く落ついて、一切を新規時直しにやり出します。御両親にも一日も早く御上京を願ひ、秋雄も帰朝しませうし、皆々様で生活したいと米子も折にふれて申して居ります。先日東京にて智恵子とも折会ひ非常によろしく私もよろこんで居ります。

今夜か明朝から中央公論へ短篇を書き、改造へは随筆、これは何れも十月号、十一月以降は改造へ文藝批評を半年ほど書くことになつて居ります。序に毎週一度ぐらゐ朝日の文藝欄へも執筆します。これで生計だけはまづ立つわけで、単行本もこの秋二三冊出る約束で、一冊はもう校正終了となりました。全集は十月から出る予定のところ先方(改造社)ではかどつて居りませんので、来年正月からにでもなりますか。

何に致せ、何もかももう半年も経てばいいのですから、決して御心配下さらぬよう御願申し上げます。

九月四日

尊大人様

春夫拝

来春までこちらに居なければならぬ都合になるとすれば、夏樹夫婦に関口町の留守を頼むといふ方法もあるかと存じます。経費の問題よりも私にとつては、留守居の人物が困つてゐるのですから。

【解説】世評のあおりで潤一郎の娘・鮎子が女学校を退学させられ、新しい入学先を探さなくてはならなくなつた。騒ぎが過熱するなか、春夫の作品発表にも支障が出るおそれもあったが、「読者にしましてもさう程度の低い人ばかりでもありませんから、世評のために作品を顧みてくれないなどの事は一切御懸念御無用かと存じます」と書いている。両親に心配をかけまいと気丈にふるまう春夫の様子が分かる。

4. 昭和五年九月二七日 春夫・千代から豊太郎宛(Ⅳ・8)

(封書 和紙一枚 墨書 持たせ文)

(表) 和歌山県

懸泉大先生

(裏) 九月廿七日夕

岡本病春

米子 拝

病春安臥太平之図

【図2】

本日廿七日 快晴

秋雄手紙来ル オカユ五碗 スルガヤ五ツ

*千代書簡(和紙一枚 墨書)

父上様

春夫様ますくおよろしくゐらつしやいますので母上様にハ東京の方も御心配ゆへもう御帰宅遊ばされ姉上さまに御上京ねがふ様に申されまして明日ハ御発ちの御よていで御ざいますので失礼ながらこのふミをおね

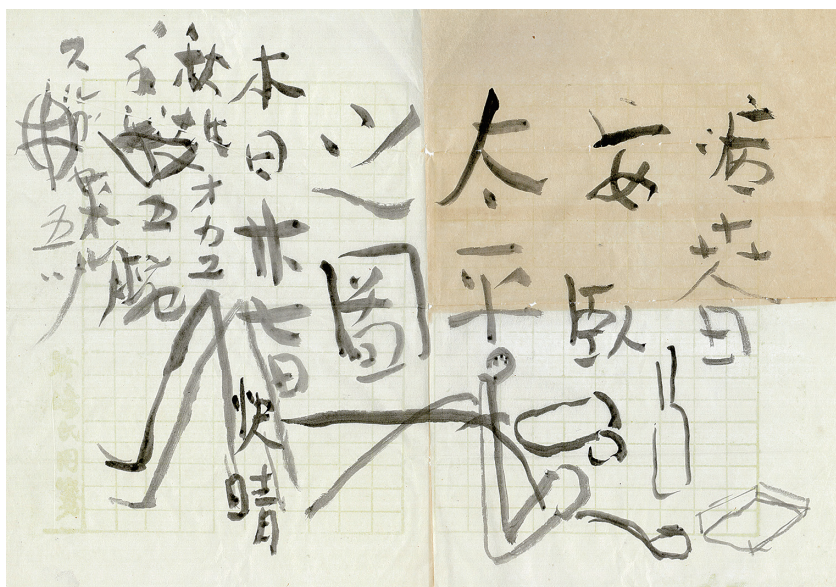


図2 病春安臥太平之図 1930年9月27日付書簡(パネル17)

がひ申上しました。

この度ハ早速にお出かけ頂き、ことに母上様ながい事お手助け頂きまして重ね／＼ありがたく、もつたいないこと、ただ／＼感謝いたして居ります。父上様にハ御道中おさはりもあらせられず御帰宅遊ばされ何よりもうれしく存じあげて居ります。その後春夫様日々目に見えてお元氣になられ、昨日あたりからおつむりもあがる様になり、お医者様もおいでのためにおどろいてゐられますほどで御ざいますゆへ／＼御心やすくおぼしめし頂きます。一時ハどうなる事かと私もほんたうに生きた心地はいたしませんでしたかやつと安心いたしました。この上ハ一日も早くあるける様になられて下里へまゐられる様それのみに祈つて居ります。この後も一方ならず御厄介頂きます上に子供まで連れておせは様になります事ハほんたうに申わけなく心くるしく存じますが御親切にあまへてよせて頂きます。何とぞ／＼よろしくおねがひ申上します。

今日ハ母上様宝塚へ谷崎の妹がおともをいたしお出かけ遊ばしました。するがや大へんよろこばれてすぐに五ついたゞきました。明日はバリコがつくにちがひないなど申されて今からたのしみにいたして居ります。

末ながら姉上様へよろしく御ねがひ申上します。

朝夕めつきりお寒くなつてまゐりました。くれ／＼も御自愛のほど願ひあげます。乱筆にて失礼を御ゆるし頂き御判読頂きます。

【解説】九月二〇日頃、春夫を突然脳溢血が襲う。倒れたあと、春夫が書いた最初の手紙。病にありながらも、父を安心させるため「安臥太平」と、不自由な手で書いている。文字を書くことが困難なためイラストを用いたのだろう。お粥や駿河屋の饅頭を食べたことがわかる。同封された千代の書簡からは、倒れた春夫の元にすぐに両親

が駆けつけ、父だけ先に帰郷したことがわかる。春夫の容態について「日々目に見えてお元氣に」なっている
と伝えるが、この頃はまだ、やっと床から頭を上げられるようになった状態であった。

5. 昭和五年九月二七日 豊太郎から千代宛(Ⅳ・9)

(封書 巻紙 墨書)

(表) □ 庫県武庫郡本山村岡本梅の谷

谷崎潤一郎様方にて

佐藤米子殿

(裏) 封

九月廿七日

和歌山県下里

佐藤豊太郎

(消印) □□・下里 5・9・27 后0—3

廿五日出之手紙今廿七日午前(十一時の便)着いそき披見いたした 病人按外よろしいとのこと何より喜ハしく急二元
気になりました 谷崎様にハ皆様御機嫌よろしき事と思ひます よろしく御伝へ被下たし 母も御許も何ほとのか
れもなきや わたしハ旅の疲労もしらす庭の草とりいたします 静にして居ると考へてばかり居ていやになるから。
するかやのおまんぢうは廿五日に出たでせうか 廿四日にハ何とかいふて居たやうに思ふか忘れた。そして病人ハ手
足をさすつたり他動運動をして居ますか。足の指先がうこくやうになれば次第に運動が自由になるから足のゆびの運
動如何之様子しらせて下さい。今日之お文之様子てハよほどよい様に思ハれますから爺も安心して今夜ハよく眠るで
せう。こちらハ柿が熟してポタッと落ちるのでそれをたべるにいそかしくて困る 今朝からもう十一たべた 年よ
りの乞食か来たので熟柿をやつて二人でたべたら乞食が大そう喜んだ 乞食おやちも柿かすきと見へる

母さんかラシヤの羽織か入用だったのを手帳に書いておいてそれを書いた事さへ忘れて保子に叱られた 鮎のあふりを入れておいた よけれハ又おくる

郵便時間になるからあとハ又

廿七日正午

爺

米子殿

皆様へよろしく

(冒頭欄外) 谷寄先生いつ頃御旅路に出発されますか御序にしらせてよ

【解説】 帰郷した豊太郎に宛て、千代は二五日に手紙を書いたようだ。それに対し「今日之お文之様子てハよほどよい様に思われますから爺も安心して今夜ハよく眠るでせう」とある。また「病人ハ手足をさすつたり他動運動をして居ますか。足の指先がうこくやうになれば次第に運動が自由になる」と、医師らしく、リハビリの指示をしている。春夫との結婚後、千代は、豊太郎の勧めで「米子」と名乗っていた。佐藤家先祖の賢い女性の名を、家庭内の通り名としていわば「襲名」させたものである。先夫の子を連れて佐藤家に入る千代が気兼ねなく暮らせるように、豊太郎は最大限の気遣いを見せ、母子を歓迎した。また、文人趣味のあった豊太郎は、谷崎のことを常に「先生」の尊称で呼んでおり、谷崎元夫人に対する敬意もあったものと考えられる。

6. 昭和五年九月二十九日 春夫・千代から豊太郎宛(Ⅳ
10)

(封書 和紙二枚 墨書)

(表) 和歌山県東むろ郡下里町

懸泉堂大人

(裏) /

九月廿九日

神戸市外

本山村岡本

谷崎氏方米子

(消印) 御影 5・9・30 □10—12

バリコウリキレ オミソダケ本日着 甚失望

六時半 【図3】ココモウゴキ舛

母上御安着の事と存じます 鮎のあぶりお千代がうま
く煮てくれました も一度今度はもつとかたくあぶり
腹をぬかないでお送り下さいませ

廿九日夕 食後

春夫

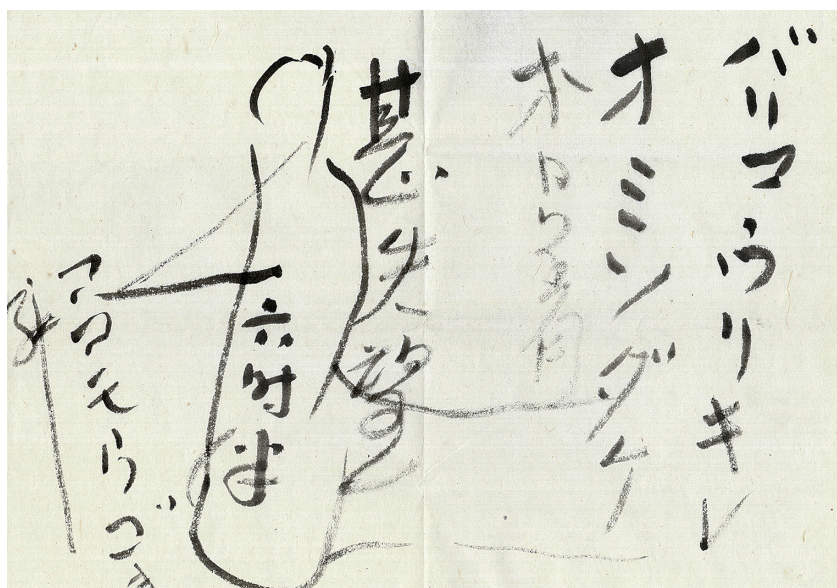


図3 ココモウゴキマス 1930年9月29日付書簡(パネル18)

*千代書簡(和紙二枚 墨書)

おかあ様お発ちのあと急に風が出てまゐりましたのでおふねの御道中如何かとお案じ申上て居りました。おさはりハ
あつしやいませんでしたか。御きげんおよろしく御帰宅の御事とおさつし申上て居りますが、おたよりを頂きますまで
ハ何となく落つきませんので春夫様にそんな事を申上ておうはさ申上て居ります。この度ハほんたうにありがたう存
じます。御二方様に御出かけ頂き春夫様もどんなにか御心丈夫におほしめされ、うれしくあつしやいましたかしら
私もかぎりなくうれしう御ざいます。万おせは様頂き、その上に私にまで御親切な御言葉頂き御力づけ下さいまして
重ねくありがたく私はほんたうにしあはせに存じます。おかあ様おかへりのあとハほんたうにさびしく、昨夜はつ
くく心細く、春夫様と二人おうはさばかり申上ました。谷崎の人達もさびしくと申して居ります。もつとく
御滞在ねがひたかつたのですが東京のお家も無人の事とお姉様御上京の御都合も考へ無理におひきとめも申上られ
ずかへすぐもほいなくおもつて居ります。

春夫様ますます御きげんにて本日から父上様の御言葉どほり他動運動をはじめました。先生もさきほどまゐられめづ
らしい快ふくぶりですとおつしやつて下さいました。十月中頃にはすはれる様になり月末にはあるけるでせうとの御
言葉でいよく心づよくなりました。早くくよくなられて下里へかへりたいものとそれのみたのしみねがつて居り
ます。

又お姉様から御親切なお手紙を頂き御礼申上ます。小づつみもとゞきました。お姉さま御心づくしの鮎高野豆腐も煮
てさしあげましたら、佐藤家代表のお料理だと云はれて上きげんで御はんを二ぜんめしあげました。姉様に御礼を
申上て頂きます。

竹田様からお味噌がとゞきました。バリコはうりきれて無いとの由にて春夫様大へん残念がつてゐられます。

お母様終平さんが大へんおそれ入りました。くれぐれもよろしく御礼を申上てほしいと申して居ります。

父上様谷崎ハ今夜旅行に出ます。かたやま津山代山中経て上京いたし十日頃には岡本へかへり、その上で吉野へまゐるさうで御ざいます。

大姉様何時頃御上京遊ばしますか。御通知頂きましたらおふねまでおむかひにまゐります

是非く御立寄頂き、春夫様の御様子御らん頂き御安心ねがひたう存じます。

でハ今日ハこれで失礼いたします。乱筆で御らんになりにくい事とお恥しく存じます。何卒御ゆるし下さいませ。

二十九日夜

米子

父上様

母上様

【解説】バリコ(アイゴ)の干物を春夫は楽しみにしていたが、売り切れて届かず残念がつている。また、「ココモウゴキマス」とユーモアを交えたイラストで自身の状態を伝えている。この書簡にも、千代の手紙が同封されている。春夫の母・政代が帰郷し、かけつけてくれた両親への感謝の文面には、「万(よろづ)おせは様頂き、その上に私にまで御親切な御言葉頂き御力づけ下さいまして重ねくありがたく私はほんたうにしあはせに存じます」と、佐藤家の人々に受け入れてもらえたという千代の安心感があふれている。

7. 昭和五年一〇月六日 豊太郎から春夫宛(Ⅳ-11)

(封筒欠 巻紙 墨書)

昨日自書之羽書着 喜んで読過いたし候 病状追々よろしく今月末ニハ歩行も出来得へき様子歎喜ニ堪へす候 左様なれハ是非迎に参り可申何くれ心構へいたし居り候 母も今日ハなれすしの用意ニ魚を多く購ひ朝から調理にいそしく候 干物ほしく候ハ、製して送るといふ 価ハ其地之様貴くないから和歌山からバリコ之干ものあとより送るといふ約束であつたかどうか あれハ毎日市場へ出ぬものらしいから こちらでもたまに漁れるばかりニ候 病状ハ気分ハよい様なが少しハ坐する事もでき候哉 足跗も趾も動くさうなが手ハ自分で食事もできるか まだそこ迄にハゆくまいか こちらでハ母とも話して居る 不幸ハ不幸ニ相違ないが半年も養生して復旧するなど所謂塞翁か馬で何かと反省之料にもなり又覇氣はかとれてよいかもしれぬ 脳力に欠陥を生しハせぬかと心配したがそれハ全然杞憂なり そんな事ハ心配すなと母へも申居り候 来年三月迄ハ当方ニて静養いたし充分病氣も治療し精神も養ひ復活更生して末永く働く様せられ度色と家庭之事将来之事も此間に相談も可致 米子ならハ父母の意も充分会得出来可申存候

谷崎先生北越より御状被下候 其后いつれへ御遊び被成候哉 大和へ御越までにハ一旦御帰館被成候哉とも存候 今日智恵子より消息あり 秋雄への送金三菱銀行へたのみ候処一日おくれたので来周来週ならてハ出ない 精と急いて出してハ見るかと申候由 今週になつても本月末までにハたしかに先方へ着可致候 御承知有之度候 主治医参られ候ハ、今一度血圧計つて頂き御通知有之度 尚又素人臭い事申すのも如何ニ候へど今月末ニ帰国出来へきや御聞き被成度 こんな事ハ充分きめる事のできべきものにてハ無之候へど本月末などハ神戸から乗れる故其方大阪より乗るより便利かと思ふ 否さうでもないか どちらでも電車で停車場へゆきそれより自働車ニて船場まで行く

のだから同じ事か 却て大阪之方勝手わかり居り都合よいか 一寸考へ違ひ致し居り候。兎二角余り寒氣二ならぬ内
帰国できれば仕合せ二候 十一月二てもまたあまり寒い事ハ有之間敷候へど

末ながら谷崎皆様へよろしく御伝有之度母姉よりもよろしく 早と

十月六日

名月の夕

爺

春夫様

米子様

坐右

折にふれて

ちゝのみの父さへもなくみの虫の

たゝひとりなるわか身なりしを

狂歌名所月

更科も須まもしらすて居なからに

名所を歌ふうそつきの歌

【解説】九月二九日付の千代の手紙を読んで「今月末二ハ歩行も出来得へき様子歎喜二堪へす候」とあり、春夫の回復ぶりを喜んでいる。

8. 昭和五年一〇月六日 春夫から豊太郎宛(Ⅳ-12)

(表) 和歌山県東牟婁郡下里町

佐藤豊太郎様

膝下

(裏) 仲殊名月

兵庫県む庫郡本山村岡本梅の谷 *梅の字は絵で示す

春代筆

米子

(消印) 御影 5・10・7 后2―□

一片明鏡照兩相思 病中只恨故園遠

十月六、

春夫

病中名月

名月や肌さむ乃身にまぶしけれ

十月六日

春夫

(封書 和紙二枚 墨書)

*千代書簡(和紙一枚 墨書)

おとう様おねえ様のおたよりありがとうございます。皆様ますく御きげんおよろしく、何よりもおめでたう存じます。春夫様ひきつゞきうすがみをはがす様におよろしくなられ本日先生がまゐられまして明後日あたりからそろくあるく稽古をはじめませうと云はれましたのでほんたうにうれしう御ざいます。他動運どうおこたりなくつゞけて居りますためか、おみあしもめつきりうごく様になり、左手はお菓子を持つてめしあがれる様に快ふくいたしましたからくれぐれも御安心頂きます。今夜の名月くもなく、下里のお二階の月おもひいだされ、春夫様とあの杉のことゝもや、今宵の月如何御らんにななどおうはさ申上ひとしほおなつかしく存じ上げて居ります。今月中にはきつとかへられます事とそれのみ祈つて居ります。九日十日ハ大さうじで御ざいますので、いまからぼつ／＼かたして居りますのですこしいそがしくいたして居ります、今日ハこれで失礼いたし又申上ます。明日ハ鮎がとゞきます事とたのしんで居ります。

(冒頭)

父上様

母上様 お姉様へよろしくねがひあげます。

米子

【解説】千代の手紙が添えられ、医師から「明後日あたりからそろあるく稽古をはじめませう」と言われたとある。医師の豊太郎に助言された「他動運動」を続けていることも伝えている。

9. 昭和五年一〇月一七日 春夫から豊太郎宛(Ⅳ・13)

(封書 和紙四枚 墨書)

(表) 和歌山県東むろ郡下里町

佐藤懸泉堂様

(裏) 寿

摂州武庫山下於谷崎氏邸

十月十七、 病春拝

(消印) 葺合 5・10・18 后□―□

毎日二三回病床に座つてみます 一昨日と今夜と立つて見ました 仰に従ひ十二分に座つて少し歩けるやうになつてから帰郷致した方がよろしいと存じます。和歌山の白味曾^(曾)非常に好評にて大に面目を施した次第です。

春夫

十月十七、

故園秋爍之図

【図4】栗、柿ほか二点の果物と花一点。墨書きで「春」の落款。

病人歩行ヲ試ム五六歩

【図5】「米子」「エカキサン」の肩につかまって歩く姿を背後から。

十月十六日

【解説】歩行練習を開始し、「米子(千代)」や「エカキサン」の肩につかまって歩く絵がある。

10. 昭和五年一〇月二日 春夫・千代から豊太郎宛(Ⅳ・14)

(封書 和紙一枚 墨書)

(表) 和歌山県東牟婁郡下里町

佐藤豊太郎様

平安

(裏) 【図】*瓜

摂弼武庫山麓本山村岡本谷崎邸にて

佐藤春夫

十月二十三日

(消印) 御影 5・10・23 后4―6

先日申上げましたが血圧はやはり百廿でした 毎日歩行練習します 一昨日より椅子に腰かけてゐます 昨日よりは眼下の海面に軍艦浮び今朝は飛行機三十六台飛び無聊を慰めます。医者に相談してミたわけではありませんが 来月中旬になれば大した不自由なしに船にも乗れるかと存じます。

春夫拝

十月二十二日

明日ハ米子の誕生日の由です

尊大人様

日々是好日 病床枕頭に菊花アリ 病窓ニハカラス瓜ヲツルシタリ



図 4 故園秋殊之図 1930 年 10 月 17 日付書簡(パネル 19)



図 6 日々是好日 1930 年 10 月 22 日付書簡(パネル 20)



図 5 病人歩行ヲ試ム五六歩 1930 年 10 月 17 日付書簡(パネル 21)

ございました。春夫様大いに無聊をなぐさめたとおほせられてよろこばれ、私も大へん嬉しう御ございました。二十五、夜のマンカンシヨクもさこそと存ぜられます。父上様御都合よろしくばすこしは当方御滞在の御予定にて御出かけ遊ばしませ 皆々御待ち申上ます。谷崎は明日帰宅いたします。当日は御近所の御こんいの方々当家へあつまり見物の由なか／＼にぎやかな事と存じます。春夫様日々御きげんにて秋の野のさま見たいなど申され今日は私おんぶして、すゝきのなびくすがた御目にかけました。食事もたくさんおいしくとめしあがります。神戸のれいのお菓子毎日が、さす五六つあがつて居ります。まだ／＼二十はたべられるのだけれどカンゴ婦さんが心配するから遠慮してゐる



図7 大キナ小供飛行機見物之図 1930年10月22日付書簡(パネル22)

【図6】犬と猫、窓外海上に軍艦、カラスウリ、椅子に腰かけて萬葉集を読む春夫の図。「萬葉集」「春夫」の自筆あり。

大キナ子供飛行機見物之図

【図7】眼鏡を手に持った人におんぶされている子供。傍には犬が座り、上空には数多くの飛行機。

*千代書簡(便箋二枚 墨書)

観艦式いよ／＼ちかづきあたりにははつてまゐりました。今朝飛行機三十六台飛びなか／＼の見もので御

など申して皆を笑はせて居ります。前橋の兄も下里へ帰りませぬ内には是非とも逢ひたいと申して近日出てまゐる様申して居ります。

おかあさまおねえ様にくれぐれもよろしくねがひあげます。

二十三、ひる

御父上様

米子

【解説】春夫が滞在する谷崎邸からは、二六日に神戸沖で催される観艦式の練習が見えたようだ。春夫の絵には軍艦や飛行機が描かれている。おんぶされた「大キナ小供」は春夫。二三日付の千代の書簡が添えられ、春夫を背負つて、ススキのなびく秋の野を見せたなどと書かれている。

11: 昭和五年一〇月二五日 豊太郎から春夫宛(Ⅳ・15)

(封書 「新宮脇田製」和罫紙三枚・和紙一枚 墨書)

(表) 兵庫県武庫郡本山村岡本梅ノ谷

谷崎氏邸にて

佐藤春夫様 自展

(裏) 封

十月廿五日午前

和歌山県下里町

佐藤豊太郎

(消印) 和歌山・下里 5・10・25 前9―12

用談秘

逐日快方ニ向ふ事と思ふ 保子への手紙ニよれハ左手にて文字も書け〔る〕様になつた様子一同喜び居候 肩によつても五六歩できると 其後大ぶんよくなつた事と案す 海軍演習で海港遠望壮大を想ふ。当方五六日毎日雨天海上穏ならず新聞も郵書もおくれ勝なり そんな事にて保子もまた出発せず

此日農工へ千式百四十余円送り候あとへ所得税か五十六円申来り昨日期限にて電かわせにて送り候あとへ保険式百余円之払込申来り居り候 コレハ本月三十一日払込と有れハ六十日間後にてもよい事と思ふ 他の保険ハ皆期日後六十日間之猶予ある事故此社も同様と思ふか勝手がわからぬ 今直ぐ払込む事ハ手許甚困るからのばしておく 差支あるまい如何

迎にゆくにはそちらに諸払ひあるべく医師の謝金等も入るべし　いか程用意すべきや
以上きぶんよき折御返事ありたし　早と

庚午十月廿五日

老爺

春夫様

病床下

十七日御認翌日發之郵書今廿日正午前便着披見　信書絵画にて病状を審に致し三人円居打喜び申候　歩行も追と上手
(上足か)になり可申婦郷之日も不遠事と存候

此頃ハ世間も追と諒解致したか雑誌なども傾向よろしくわけて小林倉三郎氏之一文は事件之真相を赤裸とに書かれ候
事故猶更世間之妄想を破り可申東京より送り来り昨夜母にも読みきかせ候(串本節調にて)母曰くこれハ立派な文士ぢや
や　原稿生活か出来ると(の)事　何よりかより其筆ニ敬服いたし一人之文士を見出したる雑誌社編集長らしい口調に
申二付いかにもと答へ候様な次第　真二よくつくされ候事感心致し候　貴詠の如く繁き世人の言草を爐火に焚く時も
近き将来ニ候

繁かりし夏野の原も人言も枯んとすらん晩の秋哉

米子も一方ならぬ心配いたしくれ候甲斐あつて今日之良果を得候事お互ニ喜はしく此厄難却て将来之戒ニ相成可申皆
と申合せ行末幸福に過し候様致し度はのみ念願致し候

先達て預け置候御守ハ粗かに致さす祈願致し候様なさるべく爺之為ニハ幾その危難を御救被下候神靈ニ候

義翁道敏居士 椿山翁

広林至徳大姉 米子刀自

孝道惟貞居士 鏡村考

恵眠童女 百合枝姉

以上

保子も近く上京する様申居り候へど時日決定せず

夏樹よりも見舞状上げた由先般信書ニ歸られぬやうな事申来り候ニ付病氣之事申遣しせひ都合して歸る様申遣し候次第 豊作過ぎて金かあからず困るとの事ニ候

爺もいつ二ても迎ニ参り可申候へと十分療養上帰国するとすれハ来月に成るべし 余り寒氣ニ相成つても困り候身体、氣〔*以下欠〕

二晩つゝけて相逢ふて快談した夢を見た 前夜ハ狂歌の談をして大笑した 次の晩ハ足下新聞配達になつてつばの広い帽を被り大きな新聞一括を脇に挟んで笑ひながら過ぎた^(また) かけ廻る壮健さハよいがいかに落ちぶれても新聞配達とハ この次ハどんな夢を見るか

左手で文字もかけ肩によつてでも五六歩も歩行できれば十一月十日ころまでにハ必ず帰れると思ふ 主治医国手にハ予想もできようから来月ニ入つたら確な処しらせてよ こちらでも用意するから 保子ハ天氣次第出發するといふが御地へよるか否か未定の由

谷崎氏最早吉野よりお帰りと存ず 宜き御伝を乞ふ 十月廿五日午前 雨瀟々

春夫様

米子殿

【解説】千代の兄・小林倉三郎が『婦人公論』一一月号に、いわゆる「細君譲渡事件」について、谷崎と春夫、千代がいかに考え、離婚・結婚に至ったかの経緯を「お千代の兄より」として発表。豊太郎は大変喜び「(春夫の)母にも読みきかせ」たことなどが書かれている。一方、夢の記述には、後遺症のため春夫の執筆活動が継続できなくことへの懸念が現われている。

12 昭和五年一月七日 豊太郎から春夫宛(Ⅳ-16)

(封書 和紙二枚 墨書)

(表) 兵庫県む庫郡本山村岡本梅の谷

谷崎氏邸裡

佐藤春夫様

(裏) 封

庚午十一月七日午前

和歌山県下里町

佐藤豊太郎

(消印) 欠〔切手欠〕

急ニ寒くなり申候 病状追々よろしく帰郷之準備之事と存候 保子色々御世話ニ相成三日朝無事着之通知昨日着いたし安神いたし候 停車場にて前橋小林様と入違ひ相成云々右にて小林様御越之事承知致し候 また御滞留之事存候 先日手紙さし上候へど御許病氣之事も不申上候 外ならぬ方故御通知ハ申上可有之とハ存し候へど如何哉と存じさし扣へ申候処却て御見舞之御辞頂き恐縮いたし候 よろしく御言わけ被成度候 爺参る迄ハ滞在候ハ、御目にかゝり先般来の御厚誼相謝可申上候へど左様に永く御滞留如何と存候 万一御都合出来るなら此際熊野詣も御誘ひ申度存候 偕て此頃九十翁病状よろしからす二三日食氣進まず談話も致さず只瞑目致し居り候故大ニ心配いたし候処昨夜発熱三十八度八分ニ達し此分にてハ爺も当分外出六ヶ敷からんかと兩人にて話し候処今朝に至り解熱少しハ食事もせられ候 強健之質ゆへ少しよろしけれハ元氣ニ相成候事常之状態に候へハ今度も左様かとも思はれ候も何分高齢故如何や

と心痛致し候 万々一も爺出向候事出来さる場合ハ母でも参(ら)さうかとも思ひ候へどそんな時ハ混雜いたし候故彼
なくてハ両家之間之幹旋できず 不得止ハ修平氏ニても送つて頂く様な手順にハでき間敷哉 色々苦慮いたし居り候
今朝之模様ニてハさしたる事もあるまいかとも思ハれ候へど確たる事ハ申かたく多少むりをして行くにしても着之翌
午後直ぐに乗船する様な手筈にいたし度可成行き度思ふ

谷崎氏其後之御行程如何 二日夜柏木発の消息ニよれハ十津川行ハ自然二の足をふみ居り又の機会に致さんかと存候
と有之候 此書状認中も最早電報でも来ハせぬかと心急かれ候

秋雄より去月中終に消息なし 当方よりハ二回出し候 貴方へハ如何 どこか悪いのでないかと心配いたし候 毎日
そんな事はかり思ひくらし候

慰めつなくさめられつ今日もまた

秋の一日を過しつるかな

婦人公論十月号十一月号各二部つゝあり 町中を持ち廻りて帰り来らず 先きさきへと持ち廻る様子小林氏之文名一
時に騒ぎ千代子の嬌名益喧し 懸泉翁の得意思ふへし 呵

皆様へよろしく御伝を乞ふ 保女ハ皆々様快くして下されたので不図三泊させて頂いたと申来り候 多謝申上候 早
と

庚午十一月七日 此日晴朗 思出之山茶花庭前ニかをる

爺

春夫様

米子殿

若し爺のゆけない場合入用のものあらハ申し次第すぐ送る 遠慮に及ばず 慈氏之注意ニより書き加ふ

【解説】春夫の「僕らの結婚」、倉三郎の「お千代の兄より」が掲載された『婦人公論』一〇月号、十一月号 各二冊を町内で回し読みして、帰って来ない様子を伝える。春夫たちが帰郷する前に、町内に春夫の結婚への理解を促そうとしたのだろう。

13. 昭和五年十一月一日 春夫から豊太郎宛(IV・17)

(封書 和紙二枚 墨書)

(表) 和歌山県東牟婁郡下里町

佐藤豊太郎様

(裏) 封

兵庫県む庫郡本山村岡本谷崎邸にて

春夫拝

十一月十六日午后

(消印) □□ □・11・17 前10―12

拝啓

御手紙拝受いたしました 定めし大混雑の事と存じます 私事一昨日御近所の友人の方に誘われて神戸へ行つて参りました ^{ハカキ}行きには阪急の電車かへりは自動車でした 神戸では大丸だの町々を歩いて二三時間歩きましたか別に何ともありませんから何卒御安心下さいませ 十七八日頃御出下さる由私の方は二十日過ぎなら何時でも結構でございます 御疲れのところを恐縮ですがどうぞ願申上舛 小包や荷物など引つついて到着する筈ですからこれ亦宜しく御願申上舛 先日頂きました野雞は非常に珍味にて谷崎氏はじめ皆々非常によろこび夕方七八人で二羽キレイに片づけました

尊大人様

春夫拝

膝下

(冒頭) 尊大人様

十一月十六日

膝下

春夫拝

【解説】友人と電車に乗って神戸に出かけ「町々を歩いて二三時間歩きましたか別に何ともありませんから何卒御安心下さいませ」と回復の様子を伝えている。この後春夫は、一二月にやっと父母のいる下里懸泉堂への帰郷を果たすことになる。

附記 本稿は、JSPS 科研費(基盤研究(C)23K00273)による研究成果を含む。書簡には今日では不適切な表現も含まれているが、著者が故人であり、原資料の歴史性を尊重する立場から、原文通りの掲載とした。

(東京大学准教授・文芸資料研究所客員研究員)

没後60年 佐藤春夫展 智恵と友情と恋と！ 出品目録

2024年5月23日～6月21日 於 実践女子大学香雪記念資料館

No.	タイトル	作者	年代	所蔵者
I-1	佐藤豊太郎宛書簡	佐藤春夫	1911年4月16日付	新宮市立佐藤春夫記念館蔵
I-2	同時代私議	佐藤春夫	1912年10月執筆	実践女子大学寄託（個人蔵）
I-3	懷疑者と歴史（未発表）	佐藤春夫	1913年4月執筆	実践女子大学寄託（個人蔵）
I-4	病める薔薇	佐藤春夫	1918年11月 天佑社刊	個人蔵
I-5	田園の憂鬱	佐藤春夫	1919年6月 新潮社刊	個人蔵
II-1	佐藤豊太郎宛葉書	佐藤春夫	1920年6月27日付	新宮市立佐藤春夫記念館蔵
II-2	佐藤豊太郎宛書簡	佐藤春夫	1920年10月20日付	新宮市立佐藤春夫記念館蔵
II-3	南方紀行	佐藤春夫	1922年4月 新潮社刊	個人蔵
II-4	月明（南方紀行草稿）	佐藤春夫	1921年執筆	実践女子大学寄託（個人蔵）
II-5	五娘送寒衣歌	歌仔冊（民間歌謡本）	1910年代 厦門会文堂書局	実践女子大学寄託（個人蔵）
II-6	五娘跳古井歌	歌仔冊（民間歌謡本）	1910年代 厦門会文堂書局	実践女子大学寄託（個人蔵）
II-7	蝗の大旅行	佐藤春夫	『童話』1921年9月号	個人蔵
II-8	蝗の大旅行	佐藤春夫	1926年9月 改造社刊	個人蔵
II-9	蝗の大旅行	佐藤春夫	1921年執筆	実践女子大学寄託（個人蔵）
II-10	女誠扇綺譚	佐藤春夫	1926年2月 第一書房刊	個人蔵
II-11	霧社（限定版）	佐藤春夫	1936年7月 昭森社刊	個人蔵
III-1	佐藤春夫宛書簡	谷崎潤一郎	1921年6月6日付	実践女子大学図書館蔵
III-2	殉情詩集	佐藤春夫	1921年7月 新潮社刊	個人蔵
III-3	我が一九二二年	佐藤春夫	1923年2月 新潮社刊	個人蔵
III-4	その日暮しをする人（表紙案）	佐藤春夫	1922年執筆	実践女子大学寄託（個人蔵）
III-5	その日暮しをする人	佐藤春夫	1922年執筆	実践女子大学寄託（個人蔵）
III-6	剪られた花	佐藤春夫	1922年8月 新潮社刊	個人蔵
III-7	「剪られた花」の一節	佐藤春夫	1922年執筆	実践女子大学寄託（個人蔵）
III-8	酔つばらび歌	佐藤春夫	1922年執筆	実践女子大学寄託（個人蔵）
III-9	幽霊	佐藤春夫	1922年執筆	実践女子大学寄託（個人蔵）
III-10	薔薇と真珠（草稿と落書き）	佐藤春夫	1921年執筆	実践女子大学寄託（個人蔵）
IV-1	勿忘草	佐藤春夫・谷崎潤一郎	1930年7月	個人蔵
IV-2	結婚挨拶状	谷崎潤一郎・佐藤春夫	1930年8月	個人蔵
IV-3	披露宴招待状	佐藤春夫	1931年5月	個人蔵
IV-4	佐藤春夫に与へて過去半生を語る書	谷崎潤一郎	『中央公論』1931年11月号掲載	実践女子大学図書館蔵
IV-5	佐藤豊太郎宛書簡	佐藤春夫	1930年8月10日付	新宮市立佐藤春夫記念館蔵
IV-6	佐藤豊太郎宛書簡	佐藤春夫	1930年8月21日付	新宮市立佐藤春夫記念館蔵
IV-7	佐藤豊太郎宛書簡	佐藤春夫	1930年9月4日付	新宮市立佐藤春夫記念館蔵
IV-8	佐藤豊太郎宛書簡	佐藤春夫・千代	1930年9月27日付	新宮市立佐藤春夫記念館蔵
IV-9	佐藤千代宛書簡	佐藤豊太郎	1930年9月27日付	実践女子大学寄託（個人蔵）
IV-10	佐藤豊太郎宛書簡	佐藤春夫・千代	1930年9月29日付	新宮市立佐藤春夫記念館蔵
IV-11	佐藤春夫宛書簡	佐藤豊太郎	1930年10月6日付	実践女子大学寄託（個人蔵）
IV-12	佐藤豊太郎宛書簡	佐藤春夫・千代	1930年10月6日付	新宮市立佐藤春夫記念館蔵
IV-13	佐藤豊太郎宛書簡	佐藤春夫	1930年10月17日付	新宮市立佐藤春夫記念館蔵
IV-14	佐藤豊太郎宛書簡	佐藤春夫・千代	1930年10月22日付	新宮市立佐藤春夫記念館蔵
IV-15	佐藤春夫宛書簡	佐藤豊太郎	1930年10月25日付	実践女子大学寄託（個人蔵）
IV-16	佐藤春夫宛書簡	佐藤豊太郎	1930年11月7日付	実践女子大学寄託（個人蔵）
IV-17	佐藤豊太郎宛書簡	佐藤春夫	1930年11月16日付	新宮市立佐藤春夫記念館蔵
IV-18	閑談半日	佐藤春夫	1934年7月 白水社刊	個人蔵
IV-19	初昔きのふけふ	谷崎潤一郎	1943年4月 創元社刊	個人蔵
V-1	佐藤春夫宛書簡	生田長江	1918年1月21日付	実践女子大学図書館蔵
V-2	佐藤春夫宛書簡	与謝野寛（鉄幹）	1919年2月6日付	実践女子大学図書館蔵
V-3	佐藤春夫宛書簡	与謝野寛（鉄幹）	1921年9月12日付	実践女子大学図書館蔵
V-4	佐藤春夫宛書簡	与謝野寛・晶子	1921年12月19日付	実践女子大学図書館蔵
VI-1	佐藤春夫宛書簡	鈴木三重吉	1918年9月20日付	実践女子大学図書館蔵
VI-2	佐藤春夫宛書簡	菊池寛	1919年7月3日付	実践女子大学図書館蔵
VI-3	佐藤春夫宛書簡	北原白秋	1919年7月2日付	実践女子大学図書館蔵
VI-4	佐藤春夫宛書簡	宇野浩二	1921年7月17日付	実践女子大学図書館蔵

VI-5	佐藤春夫宛書簡	室生犀星	1928年7月8日付	実践女子大学寄託（個人蔵）
VII-1	佐藤春夫宛書簡	芥川龍之介	1917年4月17日付	実践女子大学図書館蔵
VII-2	佐藤春夫宛書簡	芥川龍之介	1918年1月1日付	実践女子大学寄託（個人蔵）
VII-3	佐藤春夫宛書簡	芥川龍之介	1919年1月10日付	実践女子大学寄託（個人蔵）
VII-4	佐藤春夫宛書簡	芥川龍之介	1925年5月17日付	実践女子大学寄託（個人蔵）
VII-5	佐藤春夫宛書簡	芥川龍之介	1926年11月9日付	実践女子大学寄託（個人蔵）
VII-6	梅・馬・鶯	芥川龍之介（佐藤春夫蔵）	1926年12月 新潮社刊	個人蔵
VIII-1	佐藤方哉宛書簡	谷中安規	1942年8月4日付	実践女子大学寄託（個人蔵）
VIII-2	佐藤方哉宛書簡	谷中安規	1943年	実践女子大学寄託（個人蔵）
VIII-3	佐藤方哉宛書簡	谷中安規	1943年	実践女子大学寄託（個人蔵）
VIII-4	佐藤方哉宛書簡	谷中安規	1946年3月18日受取	実践女子大学寄託（個人蔵）
VIII-5	女の顔	谷中安規	1931年制作	実践女子大学寄託（個人蔵）
VIII-6	刀を振るう獣人	谷中安規	1931年制作	実践女子大学寄託（個人蔵）
VIII-7	実験室	谷中安規	1931年制作	実践女子大学寄託（個人蔵）
VIII-8	群送	谷中安規	1931年制作	実践女子大学寄託（個人蔵）
VIII-9	正夫君の見た夢	佐藤春夫	1943年2月 帝国教育会出版部刊	個人蔵
VIII-10	環境	佐藤春夫	1943年5月 実業之日本社刊	個人蔵
IX-1	佐藤春夫宛書簡	太宰治	1935年6月5日付	実践女子大学寄託（個人蔵）
IX-2	佐藤春夫宛書簡	太宰治	1936年1月28日付	実践女子大学寄託（個人蔵）
IX-3	佐藤春夫宛書簡	太宰治	1936年2月5日付	実践女子大学寄託（個人蔵）
IX-4	佐藤春夫宛書簡	太宰治	1936年7月27日付	実践女子大学寄託（個人蔵）
IX-5	佐藤春夫宛書簡	太宰治	1936年10月7日付	実践女子大学寄託（個人蔵）
IX-6	佐藤春夫宛書簡	井伏鱒二	1936年10月14日付	実践女子大学寄託（個人蔵）
IX-7	佐藤春夫宛書簡	井伏鱒二	1936年10月23日付	実践女子大学寄託（個人蔵）

パネル写真解説

No.	パネルタイトル	年代	解説	*（記）は新宮市立佐藤春夫記念館提供
1	若き日の春夫	1909年冬	新宮中学5年当時。叛逆児として名を馳せた。（記）	
2	自画像（眼鏡のない）	1915年	二科展入選作。文学を諦め画家を目指した頃。『殉情詩集』より。	
3	新宮中学同級生と	1909年	新宮の神倉神社石段にて。東郷市の姿も見える。（記）	
4	東郷市の一家	1930年代	失意の春夫を台湾に招き窮地を救った。東郷一郎氏提供。	
5	台湾地方自治創始記念絵葉書	1920年10月1日記念印	台湾同化のため地名の日本化が断行されるさなかの旅だった。	
6	台湾旅行中の春夫	1920年	前列右から2人目。唯一残る台湾旅行中の写真。森荘之助撮影。	
7	正装した春夫	1920年2月	台湾旅行前に新宮で撮影。数え29歳当時の姿。（記）	
8	娘時代の千代	1911年	前橋時代の芸者姿。春夫に贈られた写真。竹田長男氏提供。	
9	写真裏に書かれた詩	1921年	会えない千代を憶んで春夫が写真の台紙に書いた詩。	
10	淡月梨花の歌	1926年	写真の千代を梨の花に喩え、悲恋の抒情を詠みあげた。	
11	秋刀魚の歌	1921年	小田原に散った恋を秋刀魚で想ふ。もっとも著名な春夫の詩。	
12	小石川関口町の新居（1927年竣工）	1980年代撮影	谷崎夫妻と絶交後、タミと住んだ家。現在は新宮に移築。（記）	
13	新居の居間	1930年代撮影	戦前・戦後を通じて青年たちが集まる芸術サロンであった。（記）	
14	八角塔の部屋	1930年代撮影	狭い場所での執筆を好んだ春夫。八角塔は新居のシンボル。（記）	
15	春夫・タミ・みよ子	1927年頃	タミが春夫との不和を潤一郎夫妻に相談。旧交が復活する。（記）	
16	谷崎潤一郎と並んで	1930年8月	赤崎温泉にて。春夫両親に挨拶に来た潤一郎。『閑談半日』より。	
17	病春安臥太平之図	1930年9月27日付書簡	千代との結婚後、春夫は軽い脳溢血を病んだ。	
18	ココモウゴキマス	1930年9月29日付書簡	書きにくい文字のかわりに絵で病状報告。	
19	故園秋萩之図	1930年10月17日付書簡	療養中はかなり食欲旺盛。千代の料理の腕にも感心していた。	
20	日々是好日	1930年10月23日付書簡	悠々自適の向かう姿勢を貫く。万葉集に親しむ。	
21	病人歩行ヲ試ム五六歩	1930年10月17日付書簡	リハビリに励む春夫の姿。徐々に回復の兆しが見えてきた。	
22	大キナ小供飛行機見物之図	1930年10月22日付書簡	千代の慈かな看護は、佐藤家の人々に強い感銘を与えた。	
23	方哉（まさや）の誕生	1932年	鮎子・千代・方哉・春夫。小石川の自宅にて。（記）	
24	豊太郎・政代を囲んで	1937年	懸栄堂にて春夫・千代・方哉。姪の一家と姉。高橋百百子氏提供。	
25	信州佐久に疎開中の一家	1947年	方哉・龍児（春夫甥）、長男・春夫、鮎子・百百子。（記）	
26	春夫と長男（ながを）	1950年頃	疎開先で生まれた初孫。春夫が子守唄を歌った。（記）	
27	春夫の愛した孫たち	1950年頃	竹田百百子、有多子、長男。春夫宅によく遊びにきた。（記）	
28	晩年の春夫と千代	1962年	自宅でつづろぐ夫妻のカラー写真。有賀長敏撮影。（記）	